青色のヤポネシアアイランドから、
東京、を目指める。

東京スープと
ブランケット紀行

対談　荒井智史と羊屋白玉
挿絵と題字　小林エリカ

「東京スープとブランケット紀行」の1冊目

『青ヶ島』

青ヶ島ブランケットに包まれて …… 3

荒井智史と羊屋白玉 2015 年 新春対談 …… 4

天地創造　青ヶ島のお正月 …… 5

噴火の周期のど真ん中にある青ヶ島 …… 8

青ヶ島還住太鼓の担い手として …… 10

青ヶ島の魅力を繋げること …… 12

青ヶ島から「ものごとのおわりとはじまり」を覗く …… 12

どこで暮らそうと誰の中にもきっとある青ヶ島の還住 …… 17

脚注 …… 19

対談紀行 2014 秋篇 …… 20

東京スープとブランケット紀行とは …… 22

東台所神社へ向かう坂道から見たカルデラの外輪山
（2014 年 9 月 9 日）

青ヶ島ブランケットに包まれて

青ヶ島に行くのは容易なことではありませんでした。伊豆諸島南端の離島「青ヶ島」。海路も空路も、天候状況が要で、何日も前から島の方に天候を尋ね、早朝羽田空港からも電話で確認する始末、そしてその相談相手になってくれたのが、今回、わたしと対談してくれた荒井智史さんでした。

昨年９月７日、羽田から八丈島まで飛行機、八丈島からは８人乗りヘリコプターに乗り込み、青ヶ島ヘリポートに無事着陸。と、同時に、台風がやってきて、次の日の昼まで、宿に篭城でした。台風が去った青ヶ島は、小学校の窓ガラスが割れていたし、島の人たちは、家の復旧、道のお掃除をしていました。

何も手伝いはできなかったけど、役場の前を掃除する手を止めてお話につきあってくれた村長さん始め、青ヶ島焼酎工場では、12 種類の青酎をテイスティングさせてもらい、その後千鳥足で宿へむかう道で、見上げた月の美しかったこと、島猫達がくつろいでいる唯一の商店のそのあたり。毎食、青ヶ島の美味しい食材でご飯をつくってくれたあおがしま屋のおかあさん。忘れられません。

わたしの尊敬する民俗学者の宮本常一さんは、フィールドワークの心得として「あらゆるものを食べておいてください」とおっしゃっている。多分これは存分にクリアです。もうひとつの心得は「還元」。うーん。ささやかではあるけれど、このブックレットを 170 余人の島民の方に、手渡ししたいと思います。

東京スープとブランケット紀行　ディレクター　羊屋白玉

荒井智史と羊屋白玉　2015 年　新春対談

青ヶ島の荒井さんと、江古田の羊屋が、お正月五日の夜に、電話で対談しました。
昨年九月、羊屋は小林エリカさんと一緒に青ヶ島へ渡りました。
その滞在中、エリカさんが描きためたイラストを挿絵に、対談の模様をお伝えします。

---

photo: Bozzo

荒井智史（あらい さとし）

伊豆諸島に9つある有人島のうち最南端、絶海の孤島と呼ばれ日本で最も小さな村である青ヶ島で生まれ育つ。父は、島で親しまれている太鼓や島踊りといった郷土芸を伝承する組織「還住太鼓」と「郷土芸能保存会」のふたつを中心になり創設した人物であり、その影響もあって小さい頃より太鼓を叩いたり唄を聴いたりするのが好きであった。15 歳の春、進学を機に上京。島での同級生 5 人の環境から全校生徒 2000 人近くの高校へ入学。「何かで絶対1番になろう」と決意し当時部員 0 名であった和太鼓部に入り活躍、充実したキャンパスライフを送る。20 歳よりインディペンデントの太鼓奏者として活動。即興演奏を軸にインプロ、ジャズシーンの様々なアーティストと共演。2011 年に結婚を機に青ヶ島へ帰郷。現在は、実家が営む (有) 青ヶ島整備工場にて、自動車・機械整備、貨物運搬、浄化槽維持管理など環境メンテナンスから、青ヶ島レンタカー、島内ガイド、特産品製造にも従事。島の頼れる何でも屋さんとして日々ライフラインの充実・向上に努める傍ら、「還住太鼓」代表として島内外の行事・イベントに積極的に参加、青ヶ島の“還住”の歴史と精神を伝えるべく太鼓の腕を披露している。

photo: Sakiko Nomura

羊屋白玉（ひつじや しろたま）

1967 年北海道生まれ。明治大学中途退学。「指輪ホテル」芸術監督。東京スープとブランケット紀行ディレクター。劇作家、演出家、俳優。
代表的な作品は、2001 年、ニューヨークでの同時多発テロ時、ニューヨークと東京をブロードバンドで繋ぎ、同時上演した「Long Distance Love」。06 年北米ヨーロッパをツアーした「Candies」。12 年ブラジル 4 都市をツアーした「洪水」。13 年瀬戸内国際芸術祭では海で、14 年中房総国際芸術祭では鐵道で上演した「あんなに愛しあったのに」。06 年、ニューズウイーク日本誌において「世界が認めた日本人女性 100 人」の一人に選ばれ表紙を飾った。
http://www.yubiwahotel.com

photo: Kasane Nogawa

挿絵と題字
小林エリカ（こばやし えりか）

作家・マンガ家。著書『マダム・キュリーと朝食を』（集英社）が第 27 回三島由紀夫賞、第 151 回芥川龍之介賞に選出。『親愛なるキティーたちへ』（リトルモア）、作品集『忘れられないの』（青土社）、" 放射能 " の歴史をめぐるコミック『光の子ども 1』（リトルモア）など。ユニット〈kvina〉としての活動も。
http://erikakobayashi.com

天地創造　青ヶ島のお正月

羊　どうもお久しぶりです〜。あけましておめでとうございます〜。
荒　はい。どうぞ今年もよろしくお願いします〜。
羊　わたしたちが９月にお邪魔した時はそちらは台風でしたが、今は、青ヶ島[1]の海は、どんなかんじですか。
荒　大荒れも大荒れ！　海もシケてるし。大晦日の夕方まで天気よかったけど、そこからは荒れちゃって。なんか、天地創造みたいな天気です。
羊　神々しいですね〜。
荒　突然、どかんと雷が落ちて、アラレとヒョウが降ってきて、後光が射したみたいに太陽がでてきて、かと思ったら、またヒョウが降ってきて太陽が射して、のくりかえしです。どかどかヒョウ降ったから、車の屋根へこんだんじゃないかと思って、見にいったんだけど。
羊　だいじょうぶでしたか？
荒　はい。冷たい空気と暖かい空気が青ヶ島の上でぶつかると、ちょうど前線の真下ということになるので、積乱雲ができて天気が大荒れになるんです。雷になったり、冬だったらアラレやヒョウが降ったり、雪は降ってないけど。
羊　寒くはないんですか？
荒　風次第ですね。南の風が強くなると一瞬寒さが緩むんですけどね。

羊　荒井家のお正月は？
荒　いつもだと、餅つきは 12 月 30 日にやるんです。村の日頃おつきあいある方から、お正月帰ってきた人たちとか、みんな招いて盛大にお餅つきするんです。だけど、去年の年末に島で不幸があったので、今回は見送りました。
羊　まぁ。
荒　亡くなった方は、人柄が素敵な人で、皆から愛されていて、青酎の作り手でもあったんです。原料のサツマイモ作りなんかも、島に新しくきた先生とかに声かけて、一緒に畑仕事したり。魚穫れても全部配っちゃう。昔ながらの、青ヶ島の最後の人ってかんじで、僕の父達の世代にとっては、お兄さんみたいな方でした。
羊　青ヶ島の長男。
荒　はい。だから、僕も、島中のショックの具合がはんぱなくて。
羊　すいません。さっき、あけましておめでとうって言って。。。
荒　いえ、それはそれで。みんな前に進んでいるのでだいじょうぶなんですよ。
羊　・・・お悔やみ申し上げます。
荒　はい。まあ。それで、年末そういうことがあって、こっちは七日七日で念仏をあげるのですが、みんなで念仏をあげて、それで、僕はちょっと気持ちが落ち着きました。
羊　島をあげてのお葬式だったんですね。
荒　そうですね。
羊　その念仏、青ヶ島独自のものはあるんですか？
荒　はい。青ヶ島は、お寺にお坊さんが、もう何百年もいないんです。江戸時代の天明の大噴火の前からいないんです。念仏は、昔は、八丈小島、八丈島、三宅島とかも同じスタイルだったと聞いています。みんなで集まって念仏本を見ながら唱えるんですけどね。それは和讃[2]といいます。今も、お年寄りが中心になって、みんな参加して、念仏を全員で唱えます。
羊　一斉に？
荒　はい。それで、この形式は、今はもう、青ヶ島にしか残ってない。家族は毎日、有志は七日ごとに、亡くなった方の家で念仏をあげるんです。その念仏もいくつかあって、亡くなり方によっても申す念仏が違うんですけどね。
羊　四十九日まで続くんですか？
荒　はい、島の方が亡くなったら、七日七日でみんな集まる。こっちは、まだ古い風習が少し残ってるんです。
羊　青ヶ島も、昔は土葬でしたか？
荒　そうですね。でも今は島で亡くなる方より島外の病院で亡くなる方が多いから、火葬されてお骨で帰ってくる方が多いです。

羊　土葬の頃、ご遺体に焼酎を抱かせて葬ったと聞きましたが、その後、掘り出して飲むって。

荒　お葬式のときに棺を持つ人が角角に４人いるでしょ？昔はその人たちがその後の法要の時にも、みんなにアナウンスをしたり、改葬を手伝ったり、後々まで役目を果たすわけです。だから、なかなか付き合いの深い相手でないと頼めないし、受ける方にも気持ちがないとできない役だったわけです、長いお付き合いになりますから。だけどその、お墓から焼酎がでてきたりするとね、まぁその人たちが飲めたりするわけですよ、役得として（笑）

羊　お墓からでてきた酒が一番うまいとか？

荒　そう聞きますね。それに、軒下にしまってもつい飲んじゃうけど、お墓だと、めったに取り出せないから、お酒がよく寝てる（笑）。だから時々「おまえのおやじのときの酒がいちばんうまかったぞ」なんて話しているのを法事で聞きます。

羊　なんか子供としては嬉しいですね。

荒　そうですね。位牌の置き方とかも、こちらでは、位牌に頭巾をかぶせておくのだけど、四十九日にむけてちょっとずつ、頭巾を上げてゆく。一気にとっちゃだめ。青ヶ島では、そういう風習まだ続いてます。死んだ人は、４９日間お別れの準備をしてちょっとずつ向こうに行くから、頭巾もちょっとずつなのかな。

羊　宗派はなんですか？

荒　青ヶ島のお寺は、浄土宗です。一応、芝の増上寺の末寺になると聞いています。八丈島は、思想犯として、お坊さんがけっこう流れて来てるので、八丈島で和讃の形式が発達しました。多分そのあとに、青ヶ島にも伝わって、で、青ヶ島だけ残っちゃった。

羊　ガラパゴスですね。

荒　そう。だから、八丈島のお寺さんからは、是非大切にしてくださいって言われる。って聞きました。

羊　でも、そのガラパゴス、あまり頻繁に唱えたくないですね。

荒　そうなんですよぉ！！去年本当にたくさん亡くなっちゃって。僕も、おじいちゃんが亡くなったときに、まじめに念仏を覚えるようになりました。おじいちゃんの最後のプレゼントってことで、おぼえたんですけど。去年たくさん念仏あげるようになって、さすがにもうしばらくないだろうと思っていたんだけど、、。
先日亡くなった方にも、色々尋ねたいと思っていたところでした。島の場所の名前や、昔の風習とかです。昔の経験と記憶をともに持っている人だったので。なんというか、「青ヶ島最後のビッグスピリッツ」みたいな人でした。

羊　はい。

荒　ちょっと時が遅かったです。

羊　荒井さんは、いま青ヶ島に関する昔の書籍を新訳をされているんですよね？　島の歴史をアーカイブとしてまとめていたり。きっと、その方の話も残してゆこうと思っていたんですよね？

荒　そうです。あの方は、昭和のはじめのころの青ヶ島の風習とか、どんなふうに漁をしてたとか、自分のおじいちゃんおばあちゃんから聞いたお話も覚えていた方なんで、いろいろ尋ねると、大体、明治の中頃ぐらいから今のところまでの歴史がわかったんですよ。文献にしかなってなかった話を経験談として聞けたんです。今までにちょこっと聞いたお話だけでも、すごく貴重で、でも文字にまとめてメモもしていなかったし、今度機会をみて改めて話をうかがいたいと思っていたんです。思いたったらすぐやらないと遅いんだなと思いました。

羊　はい、荒井さんの青ヶ島の歴史を研究する作業。それがかたちになるの楽しみにしてます。

荒　ありがとうございます。

噴火の周期のど真ん中にある青ヶ島

羊　はい。あの、この流れでなんなんですけど、是非聞きたかったことがあって。。。でも、いいのかな。。

荒　なんですか?どうぞどうぞ。

羊　ええと、今現在、前の噴火から、230 年経ってますよね？　青ヶ島の噴火は昔から、大体、200 年くらいの周期ってことだそうですが、そうなりますと、まさに今、噴火の時期ってことですよね？ 荒井さんと以前話したときに、最新の避難のマニュアルは 20 年前のものだし、っておっしゃってて、わたしは背中ぞくぞくしていたんですけど、この 200 年周期っていうのは、どれくらい前からの周期なんですか?

荒　江戸時代の天明の大噴火の前は、確か百数十年前に一度ひどい噴火があって、それ以前は記録が残っていないのですが、火山学的な調査がいろいろされていて、今は 200 年くらいの周期かなと言われています。

羊　なるほど。それで、荒井さんは、そんな周期のど真ん中ですけど、青ヶ島に住み続けるわけですよね?

荒　そ〜〜〜〜〜ですよね〜〜。住みますよね。（笑）

羊　（つられて笑）

荒　ここ僕の故郷ですからね。噴火も含めて自然と向き合ってここで生きるのは運命みたいなもんです。だからかな?深刻にとらえてないんですよね。もしかしたら住んでいる島の人みんなそうかも知れません。

羊　周期の事実はちょっとは知ってたけど　そこに実際住んでる荒井さんというお知り合いが出来て、これからその人と話すんだと思ったときに、聞いてみたかったの。噴火間近かもしれない火山の島に住んでいる人に。

荒　何って言ったらいいのかな。難しいけど、僕たちも、日本に生まれようと思って生まれた訳ではないでしょう?それと同じ感覚かな。青ヶ島に生まれようと思ったわけでもなく、気付いたらここで育ってましたし。かつてこの島は噴火したってことも、生まれた後に知った訳ですから。

羊　あ。そうか。

荒　でも問題なのは、明治の最初の頃に生まれた人達は、その人達のおじいちゃんおばあちゃんは、還住してきた人だから、そうすればやっぱり、還住[3]の歴史を体験談として聞けたわけですよ。でも、それより後の世代は、体験した本人からの話ではなくて、又聞きの歴史になってくるの。だから、明治の最初のころの人たちは、実体験したような切迫感をもって噴火とか火山を捉えていたと思います。僕たちの世代は、「いつも煙出てるなー。なんだかここは火山らしいよ。僕、火山に住んでるんだ！」って、後からだんだん、青ヶ島に住んでいるという自覚がでてくる。

羊　どこの国も島も町も同じなのかな。

荒　うん。でもね。次、噴火したら、確実にマグマ水蒸気爆発って言われていて。余震の段階で島にひびが入って、マグマに海水が直接触れる。例えば、熱々のフライパンの上に水をたらすと、ジュワッと煙がでる。あんなかんじで、どんっと爆発するの。

羊　フライパンが青ヶ島なの?

荒　そうそう、噴火の規模としては、島の原型とどめない激しいものになるんじゃないかって。

羊　ええ？　最新の避難マニュアルにはなんて書いてあるの?

荒　島の地震計が、微振動を観測したら逃げましょう。ていうシナリオにはなっているそうなんですけど。

羊　島のテレビでも知らされる?

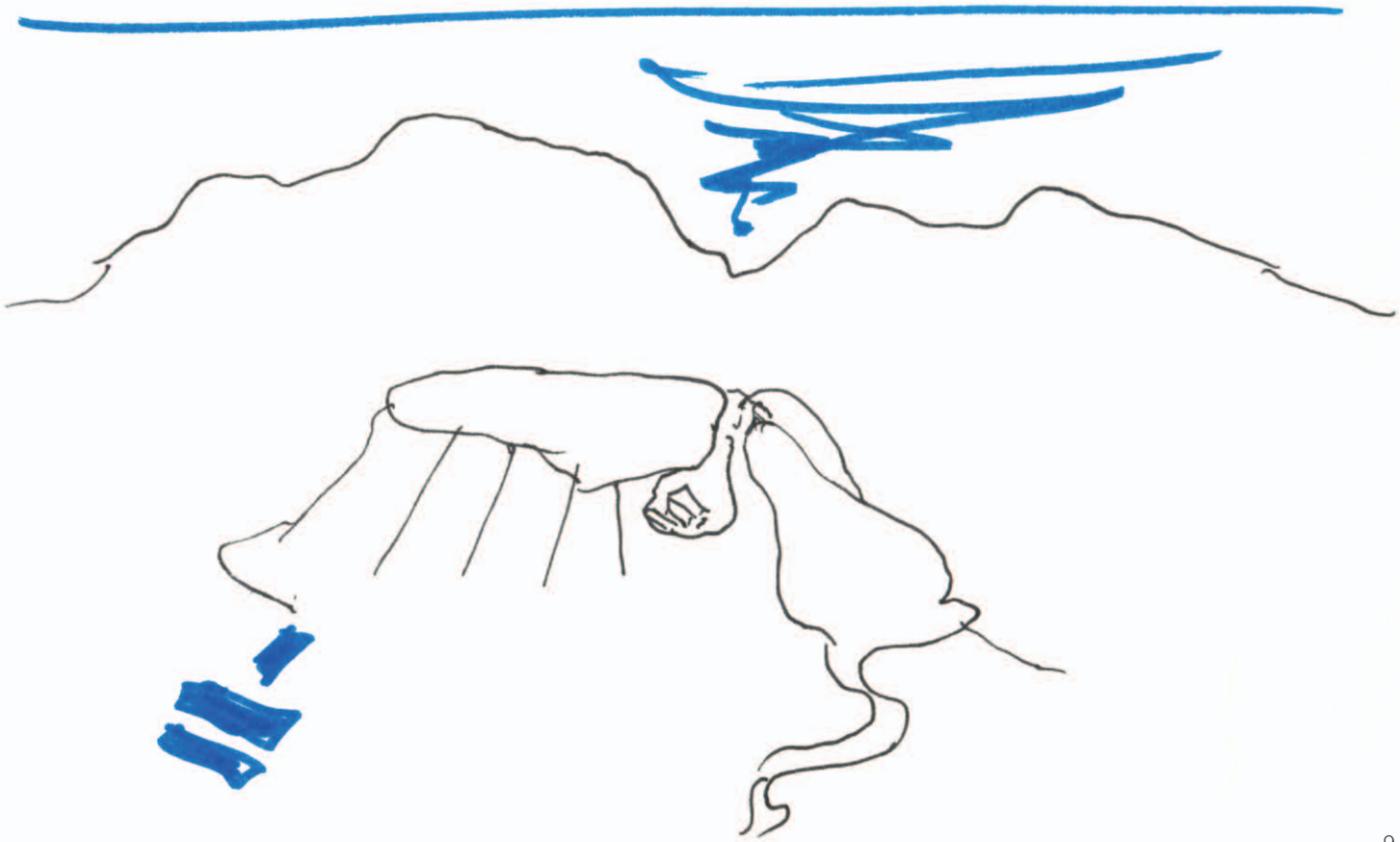
荒　いや、そこらへんの情報系統が全然わかんないの。対策本部がきっとできるんでしょうけどね。どこの自治体もそうだと思うんですけど、緊急事態は、未経験の一発勝負になるじゃない？　その一発勝負に対して、真剣に準備しているかって言うとあやしいってことです。

羊　それ肝心なのに。

荒　そう肝心なんですよ。一発勝負ってことは、二度はないんですよ。青ヶ島だけじゃないと思うけど。二度はないって割には、そういう覚悟がない。

羊　また行きたいんですけどね。青ヶ島へ。

荒　はい。



青ヶ島還住太鼓の担い手として

羊　そういえば、荒井さん来月江古田にいらっしゃるって聞きましたが。

荒　江古田のライブハウスです。フライングティーポット。今回は太鼓ばっかりのイベントなんですよ。韓国から農楽のスペシャリストが来るし。僕は還住太鼓やるし。弟とつながりがあるおもしろい打楽器系のミュージシャンぞろぞろ集まります。

羊　ゆきますよ。だって、散歩道ですから。

荒　そうですよね～。徒歩圏内ですよね。お待ちしてます。

羊　江古田は、プロジェクトのテーマのひとつだったりするので、ぷらぷらパトロールしてますけど、荒井さんは江古田と青ヶ島を頻繁に行ったり来たりしているような印象がありまして。

荒　自覚もないままにそうなってます。音出しにはかならず行ってるかんじですよ。江古田に。

羊　それで、是非、太鼓のこと聞きたいんです。

荒　はいっ。

羊　太鼓って、広く音楽や演劇もそうですけど、もともとは、自然とか神様に聞いてもらうとか、捧げるとか、神事みたいな、そんなようなことが発祥なのかなと、わたしは思っているんですけど。かたや、ライブでは人に聞いてもらう。荒井さんはそのどっちもやってますよね。去年の９月に青ヶ島にお邪魔したときには、荒井さんが月夜の下で太鼓叩いてて、スーパームーンの夜だったっていう特別な夜だったけど、まさに月と一体化していました。ライブで人に聞かせる時と、そうじゃない時と、心持ちとして何か違いはありますか?

荒　うーん。東京でミュージシャンやってた時は、やっぱりちょっと自意識過剰っていうか、わかってなかったって感じで（笑）。特別な自然のような音が出したいとか、そういう妄想みたいなのがあったんです。それで、青ヶ島に戻ってきて、かつて島にいた時のように、僕は高校の頃から太鼓叩いてたんですが、その頃のように、太鼓ってのが普段の生活のなかで、自分にとって最もナチュラルな存在に戻ったら、もうね、楽しいから叩くだけなんですよ。

羊　はい。

荒　スーパームーンの夜も、台風の後、泥かきして疲れてたけど、一日の最後に楽しくなって終わらないと悔しいよね。って、フィーリングばっちりの相方も島に遊びに来てたので。僕が叩く還住太鼓は、神楽のような、儀式の太鼓ではないんですよ。みんなで寄り集まったときに楽しく過ごすためにあるもの。郷土芸能、島唄、島踊り、みんなそう。 だからまあ、偶然、自然と一体化するときもあったのかな。

羊　でもなぜか、神楽とはちがうけど　近しいものをかんじるんですよ。

荒　太鼓の音って、音楽でも何でも、その人の生き方がでるのは確かですよね。普段、青ヶ島で生きてるってことがもとになってるのは絶対あって、自分ではわかんないけど人からみたら舞台に上がって叩いているのとはちがうように見えるのは、ここで暮しているってのが大きいと思うんですよね。

羊　荒井さんは、還住太鼓を教えてもいるでしょ?子供の部と大人の部があるんですよね?もうひとつ伺いたいのは、還住太鼓の演奏としての即興性と、技術として身につける習い事としての還住太鼓。これら両方両立させているんですよね?

荒　そうですね。還住太鼓の歴史を話しますと、還住太鼓って名付けられたのは、1979 年です。そのときの村長さんの山田常道さんと、僕の父が中心になって、若い人たちを巻き込みながら、始まりました。聞いたところによると、本来青ヶ島にあった太鼓は、神事の儀式の太鼓が中心ですけど、その神事の合間に、ブレイクタイムというか、食べて飲んでお話する時間があって、そういう時はそういう時で楽しみで叩いていたんです。かたや、八丈島ってのは、楽しみで叩く太鼓がメインです。アフリカみたいに。青ヶ島と八丈、お隣りどうしで、影響し合って、青ヶ島の人たちも、何かで集まったときに、太鼓たたいて楽しめる時間があってもよいんじゃない?って、常道さんは八丈の人だったし、僕の父はドラマーで、おばあちゃんは巫女さんで太鼓も好きだったので、太鼓の音に特別な想いがあったのかもしれませんね。それで、いよいよ還住太

鼓がスタートしたんです。

羊　はい。

荒　東京で演奏家をしていた頃は、即興とかインプロビゼーションとか、まあ色々考えちゃってやってました。でも、今は自分が即興と思う部分というのは、読んで字のごとく、瞬間で興に乗れるか乗れないか。パッと興にのって、ワッと楽しめる。それが、郷土芸能の世界における即興なのだと思います。

羊　漢字のとおりですね。即、興。まさにその肝を伝えたいかんじですか？

荒　そうですね。八丈の太鼓も　還住太鼓も然り、一番大事なのはそれで。太鼓の音が聞こえたら、わくわくして集まって、歌が出たり踊りが出たり、太鼓をまわして叩きあったり、みんなでそんな時間が持てるのが太鼓の一番の魅力ですよね。

羊　荒井さんのお嬢さんも太鼓好きですか？

荒　まだ、バチは持てないけど、好みははっきりしていて、弟の太鼓は大好きで、他の人の太鼓は見向きもしないんです。僕の太鼓より、弟の太鼓に反応するんですよ。自分にとって興に乗る太鼓が弟の太鼓らしい。

羊　嗅覚っていうか。聴覚っていうか。

荒　生き物として、まだ素直なんでしょうね。

羊　何歳でしたっけ？

荒　２歳と３ヶ月です。

羊　お嬢さんも友達同士で叩けると楽しいでしょうね。

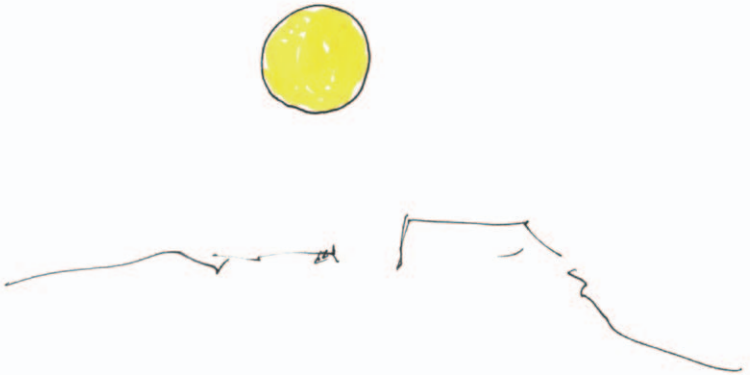
荒　でも、今、同級生いないの。小学校もひとりで入学かな。

羊　一学年、お嬢さんひとりってことですか？

荒　ひとりの学年は、前もありましたよ。でもここまで上下いなくてひとりってのはなかったです。そして新しく入ってくる見込みもないっていうのもね。

羊　子供同士で遊ぶ機会がないですね。

荒　そうですね。年は離れていますけど、何人かお姉ちゃん達がいるから、春からは、保育所にも行かせようと思ってます。



青ヶ島の魅力を繋げること

羊　お嬢さんの世代のことも考えちゃうけど、以前、荒井さんが話していて印象的だったのは、「僕の父の世代は、いろいろと貧しかった島に育って、島を豊かな生活にしてゆく一心で、経済的にも上向きにとか、東京の100年分の成長を50年で成し遂げた世代だった。もちろんそれがあったから、僕も含めて、島の人たちは、豊かに暮らせたわけです。でも今は、そのかつての勢いで、島の生活を考えるだけではないな。と、思っています。そして、それをこれからどうしてゆこうかなと考えています。」と、言っていたことです。それで、今、何か、考えていることはありますか？

荒　難しいですよねー。この前も、地域のコンサルティングやってる友達がいて、限界集落の話をしていました、そして、一番大注目されているのは、ダントツで、青ヶ島だそうなんです。人口160人で一ヶ村でしょう？高齢化率もはんぱないし。ここは、何十年かで消えちゃうレベルの人口減少率なんです。あくまで、データで見るとですよ。で、住んでいる人としてどう思っているのか？と、聞かれたんです。

羊　なんて答えたの？

荒　いや、だから、人間誰もが、明日死ぬって思って生きてないでしょう？って。

羊　生きてないですね。

荒　事実として人口が減っているのも目のあたりにしているけど、でも日々は送れているし、明日、食べ物なくなるって状態じゃないし、この島がなくなるってイメージは、なかなか持てないんですよ。死のイメージが誰も持てないのと同じです。恐らく、歳をとって、すーーーーっと尻つぼみになってゆくんでしょうけどね。僕たちも島も。

羊　外側からみてると、青ヶ島、なんとかしないと！って思うんでしょうね。

荒　はい。すごく注目しているみたいで。この人たち、どうするんだろうって。

羊　そういう注目は、荒井さん的には、よけいなお世話ですか？

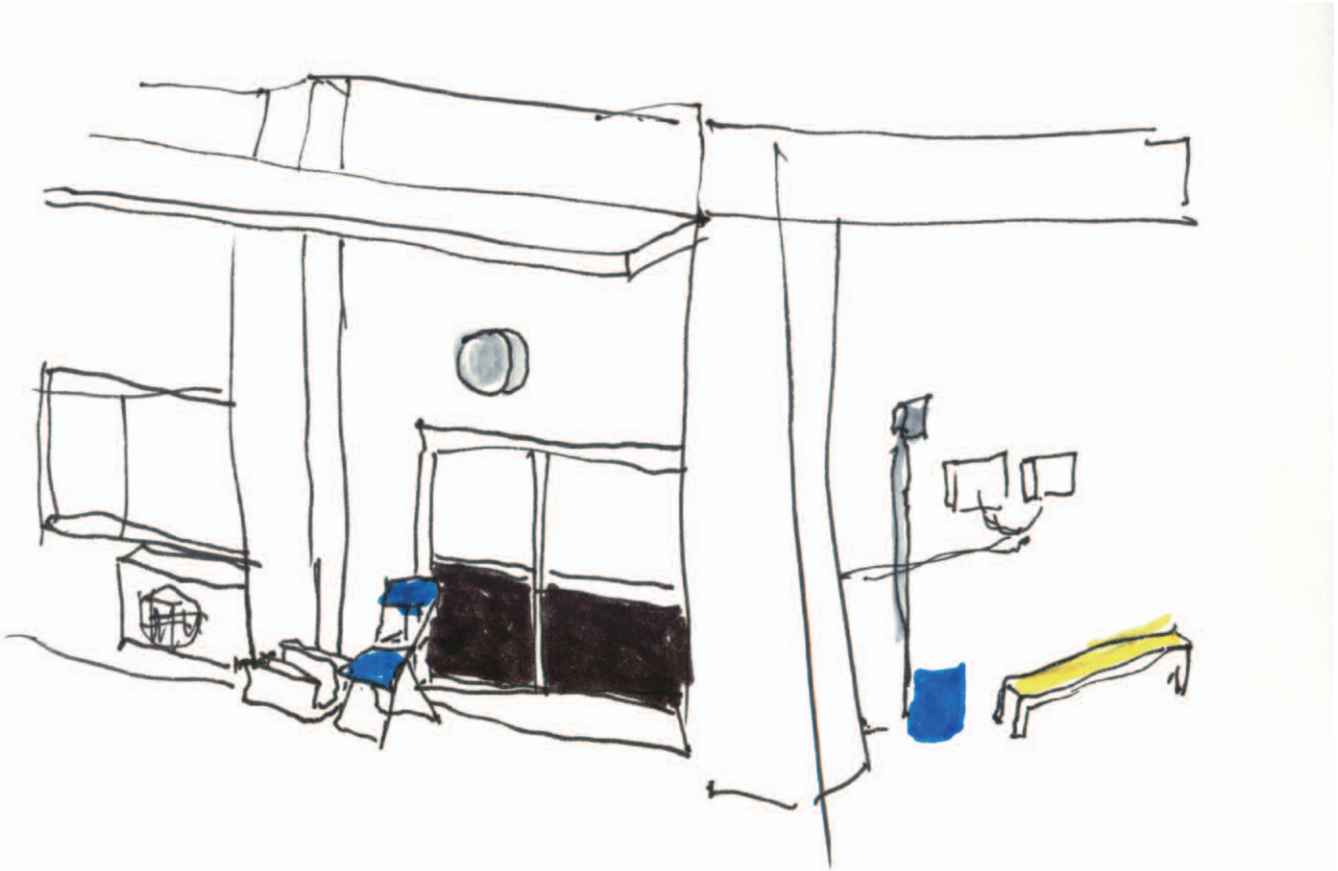
荒　全然そんなことないですよ。生きている限り、考えてゆかなきゃならないことです。でも僕は、音楽やっているせいなのかなー、何事も実感としてとらえられないと、人って、動けないよな。って思うんです。こりゃ大変だ。って、みんなで思えたらどうにかなる道が開けてくるのかな。だから、そう、太鼓、島踊り、島唄、自然や生活の全て、それらを共有する時間を持つ中で、青ヶ島で暮らしていて、いいなって思う部分ってなにかな？ってふと思う。僕の場合は、太鼓ですけど、それで、そのいいなと思うものが、なくなりそうかもしれないってことにやがて気付くし、そしたら、その好きなものたちを繋げなきゃと考えるし。

青ヶ島から「ものごとのおわりとはじまり」を覗く

羊　はい。泣きそうです。

荒　のんびりした話ですいません。

羊　いえいえ。あの、このプロジェクトは、昨年の9月は青ヶ島に訪れて、通年では、江古田という町をぶらぶらパトロールしてました。昨年末の大晦日に、江古田の台所ともいえる、江古田市場が、70年の歴史を閉じましてね。闇市の頃から続いていて、こちゃこちゃした路地の中にあったんです。そこがなくなると聞いて、だから特に、年末は足繁く通って、写真を撮ったり、市場の方とお話をしたりしてました。で、大晦日はやってきました。年が明けても、市場の建物はすぐには壊さないって聞いていたんで、今日も朝行ったんです。豆屋さんの店主さんが、少しずつ片付けを始めてて。「あんな風に終わるだなんて思ってなかったよ」と言われたので、「そうですね。」と、わたしは答えたんですけど、年末にかけて、お客さんがどんどん増えていって、市場は売り切れ続出になっていたんです。予約をしている人優先で、買いにきた人に売るものがない、という状態。豆屋さんは、「ローソクの火がきえるみたいに、しゅ〜って終わるのかなと思っていたけど、最後の最後まで、たくさん人のなかで商売ができましたよ。」と、言って笑ってました。なんとなく、その笑顔は、セカンドライフのことを前向きに考えているんだろうなって。勿論、これからも追いかけようと思っています。これは、「ものごとのはじまり



青ヶ島の唯一の商店「十一屋酒店」

とおわり」を、東京の町や、村や市場、を通して見届けてゆくというプロジェクトですが、東京にいると、始まったり終わったり流行もブームも早すぎちゃうけど、プロジェクトが始まって、一番最初に終わりを見ることになったのが江古田市場の終わりでした。自分でプロジェクトをたてておいて、本当は見たくなかったな〜、とも思ってたんですが。終わりました。しかも盛大にでしたね。あ、長くなっちゃった。

荒　はい。場所にも、一生がありますよね。お寺とかは何百年級ですけど。鉄筋コンクリートは 40 年くらいの寿命ですよね?でも、人は続いてゆく訳ですよね?そして、人が集まる場が、そのうねりそのものでもあると思うし。

羊　「土地」に「人」が入って「場」になる。ってことですよね?

荒　そうです。昔、宿場町だったとこも、今は、跡形もなかったり、そこそこでどう機能していたかってことは、そこに集まってくる人で決まってくる。なくなるってことは、ライフスタイルが変わったってことが影響したんでしょうね。人の暮しや、共有するものが変わると、その場自体も変わっちゃうんだと思います。

羊　この先、市場の跡地がどうなるかは知らないけど、噂としては、まず更地になり、鉄筋の建物になり、テナントが入るだろうと。火災関係で火事が起きたら大変だからっていう理由の閉場だと聞いてますが、勿論、そういう火災に対応できる建物ではなかったし。でも近くの商店街に引っ越した八百屋さんのように、近場でご商売始めるセカンドライフの方もいて、みなさんがどうしてゆくかというのは追ってゆきたいの。だけど今は、一度終わったこの状態をゆっくり感じたいなと思ってます。初七日的な感じで。

荒　はい。その初七日の話になっちゃうけど、先日亡くなった方のことに戻りますが、その人の代わりは誰も出来ないんだなって。その人の持っていた経験や記憶も、その人とともに全部いっちゃうんだなって。だから失うということはこういうことなんだなと、あの方が亡くなったとき思いましたね。

羊　繋げたいですね。

荒　はい。記憶みたいなものがどう繋がってゆけるかというのが鍵だなと思ってて。例えば、島踊りは、今の生きてる人も踊りますけど、確実に、200 年前も同じように踊っている。そういう意味では、踊りが同じフィーリングを記憶しているんです。紙に残した記録じゃないけど、人間としてわき上がってくるフィーリングの記憶ですよね?そういう記憶をみつけられるかどうかっていうのも、僕の場合は、還住太鼓をやってゆく上で大事なんです。例えば、春になるとね、トビウオがきて漁に出るのだけど、そういう光景もずっと続いてきたことなんです。

羊　トビウオの漁も、記憶ですか?

荒　トビウオ漁は特別ですね、ずっと昔からやっていたから。トビウオの時はやけにテンションが違うの。春の訪れを告げるみたいな。わくわく度が違うんです。

羊　トビウオってなんか特別な感じはわかります。トビウオって、突然、飛んでみようかなって思ったんでしょうかね?　魚って大体は泳ぐけど、トビウオはどうして飛んだのかな。

荒　不思議ですよね。

羊　ちょっと、飛んでみようかな〜。って。それとも、大きな魚に追いかけられて、逃げて海の上に飛び出た。

荒　多分ね。誰も知らないけどね。

羊　トビウオって、要するに、魚からしたら、突然変異ってことですよね?

荒　そうですね。

羊　そして、突然変異って重要だと思うんですよ。最近。

荒　うんうん。

羊　まだ仮説ですけど、DNA イブってあるでしょ。太古、アフリカにいた一人の女性で、彼女が地球上の人類のおおもとである。母である。って。でも、じゃあ母にも母はいるわけで、DNA イブのお母さんは誰なの?って、聞くのはナンセンスで、それは DNA の突然変異だから。そ

して、イブの子供達が、地球にたまたま適合できたから、いまだに脈々と続いていて、その子孫にわたしもいるわけで、地球に暮らしているわたしたち、アメリカ人もイスラム国家もトビウオと同じように、イブの子孫。突然変異の子孫。って話です。

荒　突然変異が起きるのも、続いているからですよね。途絶えちゃったら変化も出てこない。

羊　そうですそうです。

荒　韓国の打楽器のマスターの人に言われたのだけど、自分という奏者は、長い歴史の帯にぽっといるだけ。その中で、何百年に一度、特別な人が出てくることで、この分野が発展するんだけど、その他の人たちも同じ帯にいる。自分は特別な伝承者ではないけど、この帯の中にいるってことが大切だと思ってるって。

羊　偉大な人ってぼんっと出てくるんだと思います。プレヒストリーとヒストリーって言い方がありますよね。歴史に名を残すような偉大なミュージシャンっているけど、その前には歴史の前の歴史がある。そのプレヒストリーが続いて、色濃い歴史が浮き上がってくる。

荒　そうですよね。時々すごい人がいます。八丈太鼓だと、奥山善男さん。八丈太鼓の何百年の歴史を、ぽんって叩いちゃう。自分で、選ぼうと選ばざるとに関わらず、全てをしょっちゃってる人が、ぽんっと現れるんです。

羊　その音、聞きたいな～

荒　僕はそういう人間ではないですけど・・・・

羊　いや。スーパームーンの夜の、月夜の還住太鼓は素敵でした。色っぽいなって思いました。

荒　あれはね。単純に一緒に叩いてくれる相手が美人だとがんばるの。

羊　そうか。彼女は確か、ミス八丈！

荒　そうそうそう。

羊　なるほど。笑

羊　青ヶ島は、最近、島を取材とか紹介されたりしてますか？

荒　最近は静かですね。ちょっと落ち着いたかなーって。でもだからといって観光客減った訳でもないし。

羊　何かが急激に極端になってゆくと、色んなものがこわれてゆくかんじがします。

荒　そうですね。ここはそういう意味で神様が守ってる、この距離感が色んな意味で守ってくれている。遠くて外れていることによって、急にどかっと変わることができない。それで助かってる部分がありますよね。

羊　はい。

荒　テレビの取材とかせわしないのが、どかどかと来たとしても、やっぱりちゃんと、天気にやられるし、予定通りゆかないし。そこで初めて、ああ、青ヶ島って、こういうところなんだなって理解してくれる。この隔絶されている距離感が、色んなことの理解を深くしてくれるんです。

羊　青ヶ島は、遠いから何だか思いが募るんですよね。行ったことのない人に、わたしたちの青ヶ島滞在記を、話したりすると、思いを馳せてくれたりする。でも、たまに、熱が入っちゃって、喋りすぎてると、あ、喋りすぎてもいけないし。って思ったり。

荒　やー。そうですか～。面白いな～。

羊　笑　荒井さんラテン系ですよね。荒井さんのスタンスがMr.青ヶ島だなと。

荒　え。そうですか～？

「大里神社」約 1300 個の玉石からなる急勾配の階段３００段をのぼってゆく。

どこで暮らそうと誰の中にもきっとある青ヶ島の還住

羊　はい。いよいよ還住の話になってもよいですか?先ほども、ちょっと触れていましたが、本格的に。

荒　どうぞどうぞ。

羊　漠然とですけどね。わたし還住っていうことを知ってまだ一年経ってないですけど、還住って、今の日本に大事なことになってゆく気がして。還って住むってことがです。「帰って」じゃなくて。「還って」ってことが。都市に住んでいるとなおさらです。

荒　今、僕が調べているのは、「伊豆海島風土記」。噴火前の様子が唯一書かれた本なんです。それを調べているのも、なんで還ろうと思ったか知りたいなって思ったの。その為には、噴火前どういう状況で、噴火後どういう状況だったか。ちゃんと知らなきゃな。そして、「何が還ったか。」ってことを考えた。島で亡くなる方を見送ると、尚更考えた。年末、あの方が亡くなったときに、その人が青ヶ島になったと思ったんです。うまく言えないんだけど。住まうべきとこに自分の魂が還ってゆくってことが還住なんだなって、そのようにも思いました。還って住んだっていう事実ではないんだな、と。

羊　はい。八丈からは青ヶ島がかすかに見えるし、八丈に避難した人たちは、青ヶ島をどんな風に見つめていたんだろうって思いました。

荒　50 年かけて、還住達成したときも、真っ先に、金毘羅神社の整備をしたそうです。神事とか神社とかそういうのがまっさきに再建されたのは、魂の還るところを準備するためでした。

羊　断崖絶壁の神子の浦から、石をはこんで階段をつくった大里神社にも伺いました。すごい仕事だと思いました。

荒　そうです。戻れなかった人たちの御霊を祀る神社を、真っ先に戻れた人が再建しようと思ったんですね。自分が還っただけなら還住ではない。還れなかった多くの人も居て、その人たちをみてきて、その人たちをしょって還ってきたんですね。

羊　荒井さんも現代の還住ですよね?

荒　あら。そうですか?

羊　子供の頃って、東京は、東京砂漠と言われていて、最近だったらブラックホールかなと。なんだか、東京に飲み込まれるっていうイメージは、砂漠と変わらないですけどね。噴火みたいな自然災害ではないけど、そこからなんとか帰還して、じゃあどこに行くか還るか。そういう意味で、現代版の還住みたいなかんじします。

荒　うんうん。

羊　荒井さんの同級生の菊池栄春さんは、東京に居ながら還住してると思います。青ヶ島の食とともに。

荒　そうですね〜。春ちゃん（菊池栄春さん）は、小さい頃の話をばらすとあれですけど、学校の廊下を渋谷センター街にして、遊んでいたくらい都会に対する憧れの強い少年だったの（笑）。

羊　廊下にセンター街っておもしろい。

荒　でもその彼が 30 歳を過ぎて、自分の故郷にむきなおる。青ヶ島を自分の人生にとりいれて、僕も嬉しかったし、新宿に青ヶ島屋[4]という青ヶ島料理の店を構えたのは、ソムリエ時代を経て、あいつ、やるだけやって、自然に青ヶ島にゆきついたな。って、思える。その世界でどっぷりとやるだけのことをやらないと、自分にとってローカルだった部分に素直に目を向けるのは難しいと、思うんです。

羊　荒井さんも青ヶ島の太鼓と一緒に東京に来て、やるだけやって一緒に青ヶ島に還ったんですね。

荒　そうだといいですね。

羊　わたしも還住したいんですよね。どうしたら還住できるのかな〜?わたしはまだ東京というブラックホールに飲み込まれたまま右往左往しています。

荒　羊屋さんの言い方わかる気がする。面白いね。今、還住したい人って、いっぱいいるかも。アイデンティティが、とかって言われてもよくわかんないけど、還住ってしっくりくるんじゃないかな。

羊　アメリカの人と作品をつくったときに[5]、その人が言ってました。アメリカは移民の国だから、最初は誰もアメリカ人ではない。次第にアメリカ

人になってゆくんだって。そして、作品創ってゆくうちに、「ホーム」ってキーワードが出てきたんですね。建てられた家に限られたことではないんです。ある瞬間、窓から見えた葉っぱとか。どうしてもここ、っていうのを、おのおのホームと呼んでいました。今考えれば、あれはアメリカ版還住の作品だったのかもしれない。

荒　うんうん。

羊　このプロジェクトでもうひとつ取り組んでいるのは、「東京一箱」って、言うんですけど、ある女性が、東京で家を持とうとしていて、それをドキュメントしてます。娘さんと二人暮しです。不動産巡りをしたり、いいなと思った家を見に行ったり、色んな情報を集めています。母娘ふたりが住めて、友達たちが自由に集まることが出来て、庭もあって、って、夢は広がってゆくんですけど、一度、一番大事な要素は何かってことを話し合いました。彼女に、「最低限、何があったら、そこをホームと呼べる?」って聞いてみました。彼女は「娘」って答えました。立地条件や広さやお庭よりもなによりも、大事なことがわかってよかったです。わたしは、このお母さんと娘さんの関係からも、還住って言葉が浮き上がってきました。

荒　うん。そうですね。いや、今ね、島にわかブームじゃないですか?

羊　そうなんですか?

荒　島の為に何かしたい。とかっていう大学生がけっこういるの。

羊　うんうん。

荒　・・・・・むずかしいんですよね。(笑)

羊　(つられて笑)

荒　そういう子たちって、役に立ちたいとかそういうこと言うんだけど、自分が真っ先に席に座って動かなかったり。

羊　はいはい。

荒　僕は、彼らに、おじいちゃんとおばあちゃんは元気なの?って聞くんですよ。ちゃんと話したことないっていうから、まず会って話してみなよ。って言うの。だって、自分たちのルーツって、せいぜい、おじいちゃんおばあちゃんまでにしか辿り着けないんですよ。もっと先の祖先まで時間を遡れない。時間にしたら 200 年くらいだけどね。青ヶ島に関しても、いくらがんばって調べても、生に近い声を探し出してゆくのは、難しいんですよ。なかなか辿り着かない。たった 230 年なのに。

羊　はい。

荒　島に来る前に自分のおじいちゃんおばあちゃんの話きいてみなよって、そういうところから始めるのが一番実感があるよって言うんです。

羊　わたしも、母方と父方の祖父母に、いろいろ根掘り葉掘り聞いてた時期ありました。

荒　自分っていう命があるってところからスタートして、遡ってみるのが、その人にとって、一番、真っ当なことじゃないかな?って思うの。

羊　ホームとルーツですかね。

荒　うん。そうそう。

羊　あー。なんかこの新春対談、とても充実してるなー。

荒　いやー。今年は、還住達成から 180 年のメモリアルイヤーですしね。

羊　島をあげてなにかすべきですね。

荒　しますよ。毎月一回、還住太鼓主催でなにかするの。

羊　今月は?

荒　まずは、新年会。本当は還住太鼓主催で神社へ初詣に行こうと思ってたのだけど、法事が入ると、仏様の週間になるのね、念仏もあげに行くし。だから、初詣ではなくて 50 年前の青ヶ島の映像を見る上映会をしました。

羊　なるほど。来月は?

荒　オーストラリアにゆくんです。還住太鼓の初の海外ワークショップ。

羊　すてき!

荒　還住太鼓の歴史講座シリーズも考えてます。

羊　江古田にもいらっしゃるし。

荒　そうです。江古田で会いましょう。

羊　はい。お土産話楽しみにしてます。

荒　それから、青ヶ島でも会いましょう。

羊　はい!

脚注

[1] 青ヶ島
東京の南 358km、八丈島の南方 65km にある周囲約 9km の火山島。伊豆諸島の有人島としては最も南に位置し、島全体が東京都青ヶ島村に属する。人口約 170 人。八丈島から見える青い島へ、ヘリコプターで 20 分。

[2] 和讃
仏教歌謡の一種。平安時代に成立し、広く民衆の間に流布し、仏教の布教だけでなく、日本の音楽にも大きな影響を与えた。

[3] 還住
青ヶ島では、安永 9 年（1780 年）に始まった噴火活動が天明 5 年（1785 年）になって激しさを増した為、島民が八丈島に避難して無人島になった後、50 年後の文政 7 年（1824 年）に、島民全員の帰還、そして島の復興を達成したことを指す。柳田國男が昭和 8 年（1933 年）に発表した「青ヶ島還住記」により、「還住」が知られ始めた。

[4] 青ヶ島屋
2014 年 3 月、新宿にオープンした、伊豆諸島の野菜や鮮魚を使った海鮮居酒屋。店長は、青ヶ島出身の菊池栄春氏。青ヶ島焼酎の品揃えは日本一。青ヶ島ゆかりの人々で、店はいつも賑わっている。

[5] アメリカの人と作品をつくったときに
2007 年、東京国際芸術祭にて、アメリカ人劇作家トリスタ・ボールドウィンの「DOE（雌鹿）」を、羊屋白玉が日本人俳優とともに舞台化した。それから、2013 年まで国際共同製作は続いたが、未だ未完である。

青色のヤポネシアアイランドから、東京を眺める「対談紀行 2014 年秋篇」を振り返る

2014 年 10 月 8 日　アーツ千代田 3331 1F　コミュニティスペースにて

青色のヤポネシアアイランド、わたしは、まだ見ぬ青ヶ島を、そう呼んでいました。昨年の 9 月 7 日から 9 日、ようやく辿り着いた青ヶ島での三日間。いっしょに渡航した小林エリカさんと過ごした、台風が来ていたにもかかわらず静かな日々。そして、ひと月後の 10 月 8 日、そこで起きたこと、それから考えたことを報告する為、彼女とのダブルホストで、菊池栄春さん、北川フラムさん、新川貴詩さんを、ゲストをして招きました。

受付は、菊池栄春さんに用意してもらった青ヶ島焼酎の試飲コーナーにもなり、お客さんに青酎を味わっていただきながら、対談はスタートしました。

青ヶ島へリポートに着陸したとたん、島の人に「台風を連れて来たねぇ。」と、言われたこと。海を見に行ったら波が港を飲み込みそうな勢いだったこと。宿に篭城し、宿の書棚にあった伊豆諸島に関するたくさんの本を貪り読んだこと。台風が去った後の復旧作業、なにも手伝えなかったおもはゆさの中、島の探索ででかけたこと。道に寝転び火山の島の地熱を感じたこと。地熱で蒸して食べた青ヶ島の野菜や卵やお魚のおいしかったこと。還住後、島の人たちがひとつひとつ運んだ石の階段をのぼり神社をおまいりしたこと。火山の噴火口、抹茶ババロアのようなカルデラを見下ろしたこと。最後の夜の月の美しさ。還住太鼓と唄が聴こえて来たこと。青ヶ島焼酎工場見学のティスティングで酩酊したこと。そんなわたしたちを眺める島猫達。

写真をお見せしながらの、報告が続き、ゲストのみなさんに、感想を述べていただいた中で、北川フラムさんがこうおっしゃいました。「一度訪れただけのまだ知らない土地のことは語らないようにしています。」

それはわたしたちのフィールドワークへの批判という意味ではなく、長年、アートを通して様々な地域と関わってきた、北川さんの態度と信条でした。

実際、島でお話が出来たのは、10 人もいませんでした。台風の後、役場の前を掃除する手をとめてお話ししてくれた村長さんや、役場の方、宿の方、それから、港で働く方、船を待つ方たち、などでした。青ヶ島は、実際、わたしたちだけではなく、たくさんの取材や調査の方々が来ていると聞きます。わたしたちも、青ヶ島をフィールドワークの対象にさせてもらいましたが、その少ない会話の中でも、知らないうちに島の魅力に浸かってしまったままですし、島とそこで暮らす人々たちの運命に無関心ではいられなくなっていたのです。

わたしは対談後も、自分にとって、旅をしたり、フィールドワークをすることは、いったいどういうことなのだろうか。と、考えていました。

そしてさらに、かの地で、作品を発表することについてもです。

土地を知り、人を知り、また自分の考えを確かめてゆくための方法であるということは確かなのですが、それではいったい誰のために行うのか。

できれば、みなさんにお渡しするこの小誌の、このページのあたりに、この問いへの小さな答えを書きたかったのですが、まだそこまでには至りませんでした。

ただ、願望はあります。またどこかでだれかと出会いながら、フィールドワークが終わろうとするその頃に、その土地の方から言われたいのです。「あなたはとうとう私になにも質問をしなかったが、それでよいのですか?」と。

東京スープとブランケット紀行　ディレクター　羊屋白玉

右から、小林エリカ（作家・マンガ家）
菊池栄春（青ヶ島屋店主）
新川貴詩（美術ジャーナリスト）
北川フラム（アートディレクター）
羊屋白玉

撮影：杉田協士

[東京スープとブランケット紀行]とは

statement:　ディレクター羊屋白玉の言葉

わたしにとって東京は、とっても長いこと、未来都市だった。今は、遺跡の街を歩いているように思う。どちらも美しい調べだが、組曲「東京」の楽譜は、いまや、生活者であるわたし、演奏者であるわたし、が追いつかないほどの加速記号でいっぱいだ。この楽譜に、泉のような小休符をいくつか、記したい。

project:　東京(住)+スープ(食)+ブランケット(衣)+紀行(徴)

生活に関わるささやかなテーマ。そのいくつかを同時進行で取り扱ってゆくと、各テーマが影響し合い、分裂と統一を繰り返しながら、やがて大きなひとつのテーマに辿りつく。その最初のいくつかのテーマがこの4つです。

東京 一箱
夢の一箱を、東京に転がす。

江古田 スープ
東京のラビリンスな交差点、
江古田で迷う。

青ヶ島 ブランケット
青色のヤポネシアアイランドから、
東京を眺める。

対談 紀行
転がしたり、迷ったり、眺めたり、
そして、東京と話したい。

この４つのプロジェクトが、転がりながらも成就する時、わたしたちの現前に広がる世界が一瞬止まり、それまで費やしてきた時間のプロセスが立体的に問いかけてくる。そんなアートプロジェクトを目指しています。

people:　運営しながら創作するわたしたち

ディレクター：羊屋白玉　アシスタントディレクター：伊藤馨　チーフアドミニストレーター：宮原清美
アシスタントアドミニストレーター：糸山裕子　齋藤優衣　デザイナー：草梛亮
テクニカルディレクター：糸山義則　フォトグラファー：中澤佑介

主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人指輪ホテル

Tokyo, Soup, Blanket and Travelogue

東京スープとブランケット紀行『青ヶ島』

発行：　アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
監修：　羊屋白玉
挿絵と題字：小林エリカ
編集：　伊藤馨　宮原清美
デザイン：　草棚亮
写真：　東京スープとブランケット紀行事務局、Bozzo、
Sakiko Nomura, Kasane Nogawa、杉田協士
印刷：　グラフィック
発行日：　2015 年 3 月 8 日

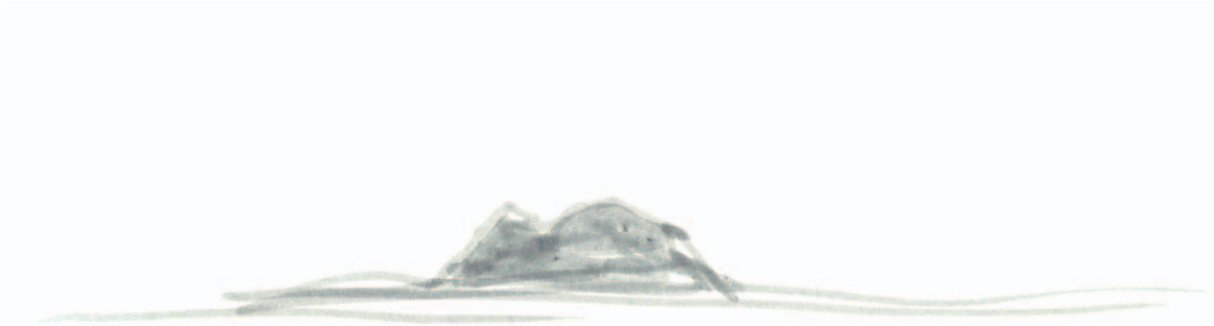
本書に関するお問合せ先
東京スープとブランケット紀行事務局
web　http://soupblanket.asia
mail　sec@soupblanket.asia

© 一般社団法人指輪ホテル
© アーツカウンシル東京

［東京アートポイント計画］とは

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPO を育成します。

公益財団法人東京都歴史文化財団　アーツカウンシル東京
〒 102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス 8 階
TEL 03-6256-8430
http://www.artscouncil-tokyo.jp
E-MAIL info-ap@artscouncil-tokyo.jp



青ヶ島

東京スープとブランケット紀行『青ヶ島』（非売品）

東京文化発信プロジェクト